

# 集

俳句フォーラム

2018年4月 第67号

白山句会

葉山吟行

田中藤穂

秋の海海亀の孵化見張る小屋  
松ぼっくり一つ拾ひて海を去る  
車輪梅の紅き実はじけ美術館  
竪穴住居跡に波音秋の雨  
夕暮れて海鳴り高し秋茶房

ゆっくり

浦川哲子

冬日透くゆっくり開く自動ドア  
曇りのち晴れ白い躑躅の返り花  
下町の路地また路地や一葉忌  
時雨るるや旅籠所の匂のもの  
極月や永世七冠達成す

哲学堂

平野無石

潮騒のさやか葉山の落葉径  
秋寒し沖に声なき舟ふたつ  
三四郎生れし文机丸火鉢  
幽霊も神の使いか冬ざるる  
唯心と唯物の間姫椿

秋の浜

都築繁子

波が消す浜の思い出秋の空  
海亀の卵保護中秋の浜  
黒猫の山房案内石路の花  
冬日和漱石ゆかりの地をめぐる  
喫茶店さがす雑踏暮近し

冬紅葉

植木やす子

松越しに艫を漕ぐ影やそぞろ寒  
海亀の孵化まで見守る秋の浜  
猫塚の戦禍語るや冬ぬくし  
着ぶくれて石の狸灯の腹のぞく  
冬紅葉川の向うに色を添え

冬灯

工藤はる子

どつしりと地を這う松や秋の風  
冷やかに雨たたきをり波がしら  
石露の花早稲田は坂の多き町  
我が内の狸照らすや冬灯  
水洩や哲学用語皆むずかし

大硯

篠田純子

波音に癒され秋の雨に濡れ  
鳶ひよろあと波音秋のカフエ  
洋窓より冬日差したり大硯  
冬ぬくし洋書の棚に楽茶碗  
ガンジー像撫ずるや冷と膝がしら

初版本

大山夏子

秋の波こけしと聴きて幼き日  
冬の日や漱石全集初版本  
万年筆の草稿染みし丸火鉢  
枯尾花聖人像のみな瘦軀  
矩日や遺影を訪えば遺児二人



冬至

江口九星

星近し往きも帰りも凍てる道  
杜氏と呼ばし亡父を想う冬至かな  
秋暮るるメール残して朋逝けり  
妻病めば故郷からの葡萄かな  
柚子の実や熟れることなく土となり

縄文体験

大山夏子

図書館の明るき窓へ色鳥来  
木の実磨る縄文体験秋うらら  
潮入りの御猟場の跡帰り花  
存らえて冬のかえでのかつ散るや  
松飾年々少なくなるなる門扉

レーニン像

渡辺節子

レーニン像の鼻に氷柱やほほえまし  
松ヤニのガム極北め民の冬  
神々し冬の夜明けの茜色  
仕込み味噌そつと舐めみる冬ちかし  
紫蘇の実のむすびなつかし母想う

冬木の芽

石川賢吾

馬肥ゆる白粥に塩ひとつまみ  
庖丁の抜き差ししならぬ大南瓜  
仲見世の垣塙ぬけだす薬喰  
磨り減りしカンカン地蔵冬木の芽  
引き際の粹な酒客や街師走

沈黙

中川のぼる

竹の春風の声聴く人知れず  
残る虫老いてあせるを見透され  
冬風を汽笛が分つ旅はじめ  
孫笑むや椎の実ひとつ手に隠す  
雑踏という沈黙へ冬夕焼

浜離宮

伊藤昌枝

枕辺に忍ばす香り榎櫃の実  
江戸の色残る離宮や冬の松  
冬うらら三百年の松青し  
ゆりかもめに案内をさる隅田川  
敷松葉もたげて覗く青きもの

里神楽

楠本和弘

星降り来露天で見上ぐ無となりて  
冬桜獵場に残る覗き口  
戯言を海に投げ捨て海鼠食ふ  
旅日記開きそのままに漱石忌  
唐獅子の砒深し里神楽

ジャスミンティ

吉宇町麻衣

皿割れて叱られたよう冬の月  
海近きビルの上空冬のとび  
栗剥いてため息あとの土鍋かな  
色々に折り合いつける秋夜かな  
星月夜四半世紀のジャスミンティ

虚と実

渡部恭子

石一つ積みてケルンの秋思かな  
冬の木の菰巻きされて新しく  
老松の不自由託つ冬囲  
やわらかな冬日をあさる鯉の口  
冬桜空の青さを持て余し

冬囲

小沢えみ子

石一つ積みてケルンの秋思かな  
冬の木の菰巻きされて新しく  
老松の不自由託つ冬囲  
やわらかな冬日をあさる鯉の口  
冬桜空の青さを持て余し

揺蕩えて

酒井たかお

李白なる古老大の字鷹渡る  
山眠るいわきの湯殿はなの舞  
澄み渡る冬の星座に虚無を見て  
魂の揺蕩えてゆく冬椿  
勘違い素直に戻れぬ帰り花

# 円の会

帰り花

山田邦彦

ひるがえり又さよならを秋つばめ  
秋入り日過去なるものに鯨尺  
行く秋の満ちくる川のひかりかな  
カーナビに載らない小路帰り花  
吊り橋に姿勢を正し冬紅葉

ひたすら

若泉真樹

芭蕉の侘ひたすら追って秋の暮  
栗を選ぶ角突き合わすこともなく  
吹き分けて古き道見ゆ秋の暮  
万年橋芭蕉と渡る秋の風  
野良猫やふかふか落葉に移り住む

木の実降る

石川りゆうし

濡れ落葉掃くに程良き瘦せ箒  
木の実降る戦禍に耐えし母の背に  
行く秋や生家無住となり久し  
秋高し灯台白き孤独かな  
風紋を残して去りぬ秋の風

海の色

大山夏子

観覧車月に近づき手をのばす  
まだ灯る窓真夜中の月あかし  
大銀杏の黄葉残照疇となる  
冬紅葉散りて水面の言霊に  
冬富士の肩黒々と日の没す

日記

日置游魚

一人はや鬼灯鳴らす遊びとて  
椋鳥の飛来ひたすら待つレンズ  
虫集くこの世にありてこそあの世  
書き遺すことの是々非々日記買う  
夜又となる夢のあとさき冬の靄

秋 仁上博恵

霧深き高野を目指すケープルカー  
秋天下ボール取り合う子等の声  
戸を放ち隈無く秋を招き入る  
数式をファッションに替え枯葉舞う  
電飾に街は一気にクリスマス

神の旅 平野無石

出雲への直行便も神の旅  
湯豆腐や旬心つなぐ喜寿米寿  
無為の日の静かに暮るる冬座敷  
縁ひとつ結びて暮るる神の留守  
小春日や老にやさしき風の町

枯野 重原爽美

枯野行く草一本の手にあそぶ  
空っぽの電車枯野に音残す  
手に包む茶の香の窓や石露の花  
空よりも明るくありし大枯野  
血を嘔きし鞆に膏詰めにけり

墨流し 小笠原妙子

役者絵の鼻は写楽や温め酒  
名残月有楽町のビル狭間  
雪吊は空へと向かふ心柱  
返信は絵手紙にする漱石忌  
墨流し雲間から射す冬茜

おでん 三羽永治

温泉煙に桶の響きや秋気澄み  
秋野へと園児の赤帽列なして  
みちのくの小春を包む里ことば  
いさかひもいつかおでんの湯気の中  
熱爛や牧水しのぶ一人旅

冬支度 治部少輔

帰り道遠回りして金木犀  
虫の鳴く一人深夜の露天風呂  
熟柿啄む鳥が二羽いて空青し  
火の粉ふるこおろぎ橋の紅葉かな  
白川郷山も暮らしも冬支度